

経 験 —— その三 —— (最終回)

村 田 修 子

書かれたものを読んで、そこからずばりと貴重なものを得る種類のものとは違って、読んだあととそれぞれが問題を持つて考えることをねらえば、ということでお引受けして一年たちました。最後ですから、今度は私がこの世界にいたからこそ経験できた珍しい部類に属することを書いてみようと思えます。

改めて数えたことはありませんが、私のふれた多くの子どもたちはみな違います。その人数が多くても名前を聞くと、それぞれの子どものしたこと、着ていた洋服の色など、何かは思い出すものです。ですからまして個性が強すぎて扱うのがむずかしくて苦労した子、とっぴな行動をした子どもについては、いつになっても忘れることはできません。ですからそのときは教師も親も困ったり肩身の狭い思いをしたかも知れませんが、あとになって大局的にみれば、

「そうだったからこそよく覚えていられたのだ」と平凡でないことの有難味もひとしお、といえるかもしれません。

大分前のことですが、個性の強い男の子が多い組がありました。「このひとたちはなに年生れなのかしら」なんて考えてしまうくらいとてつもないことをやりました。三歳のときにしたことを拾ってみますと、

- 誰のお弁当でもかまわず、ついである自分のお湯をかけてしまおう。
- お弁当置くところに数人で行って、誰かれの区別なくバスケットからお箸を出して集めてしまおう。
- 水槽の中に手を入れて金魚をつかんでポケットに入れてしまおう。桜の木から落ちてきた毛虫もポケットに集めて家を持って帰るといおう。
- 小さい積木をポケットに入れてみんなでへやから出ていく

のについて行つてみると、お便所の穴の中につめている。など目が離せない毎日でした。

三学期になった頃、その中の二人はお兄さんになりました。すると前に輪をかけてひどいやきもちの状態になり、既に卒業していた母親と別れる朝のひとつときも、私は眼鏡をとばされないように準備してから受取るという有様でした。

その一人は普段余り口をきかず黙っていて、結果的にはみんながあつというようなことをやるので、友だちは幼いながら、その男の子を変っている子、と思っているようでした。

遂に母親が大学の専門の先生に相談に行きました。その結果、「今迄の様子からして環境を全然変えるのも一つの方法なので、自分の家で預かることができれば是非そうして上げたいが、考えると家族構成がうまくないので効果がないと思うので……」ということだったので、その条件を伺ってみます。

- この趣旨を理解してくれる親であること
- 子どものことに余り手を掛けることをせず、どちらかというときさっぱりした扱いができること
- その家庭の全員がこれについて了解して協力してくれること

○兄弟がある場合は、好ましい年齢関係であること

一人の子どもを預かる、ということはその簡単にできることではありませんし、その上前にあげた様な条件をそなえた家を探すことは至難なことですから私は余り期待をしませんでした。

ところが、普段から仲よくしていた同級の女の子の母親が預つてもよい、ということになり、しかもその女の子の兄が二歳年上であることも好都合の条件なので、両方の家で話し合った上いよいよ実行することになりました。

期間は一月ということ、男の子はトランタに衣類を一式つめて行ったそうです。行くことについては親がどういったのかは聞きのがしましたが、別に嫌がらなかったようでした。

その家から兄は小学校へ、その妹と男の子は同じお弁当を持って幼稚園へきました。園ではその女の子とは特に遊ぶわけではなく、最初の頃は前と同じようでした。ただ家に帰ると今迄のように何でもいう通りになっていたのに、今度の家には二歳年上の男の子がいて、その子の言動が力を持っていたし、女の子がとてもしっかり者だったので、衣類の脱着などもさっさと済ませてしましますしその母親も手伝うなど

の一切特別な様子はしないので、男の子もやらざるを得ない、ということになって、半月位たつとなにか変わってきたような感じがしてきました。

私は一つの試みとして、その子をみんなの前に立たせてみようと思いました。そこで帰りの皆が椅子に掛けたとき「昨日何して遊んだか聞かせてね」といって、その男の子の二人前の人から順番に前に出てきてもらって話を聞きました。

いよいよその男の子の番になりました。今迄そういうことなどしたことがなかったので、私もどきどきしてどうなることかと思っていました。他の子どもたちの中からは「やらないんじゃない」などの声も聞かれました。そばに行つて「あなたの番なのよ」と言いますと、こくりとうなずくのです。何につけてもぐずぐずするので、これから先どうもっていいか、と思ひながら、「じゃ、みんな目をつぶっているから、その間にここまでいらっしやいね」と私がいうと皆は本当に一せいに目をつぶりました。そのときの皆の顔が真剣だったのには驚きましたし、感動しました。

それでも大分長いときがたちました。目をつむったままもう一度うながすと、ドサリ、と大きな音がして、男の子は椅子から床に落ちてはいつくばりました。「早くいらっしやい」

とその様子を薄目で見た私のうながしに感じてその子は床をそろそろとはって長いことかかり皆の前に立ちました。

私はしっかりとつかまえてやって、それからは驚きや感激を押し殺して極く普通のことのように「何したの」と聞きました。ぼそぼそと話し終ったとき、友だちは皆一せいに拍手をしました。それ以後その子は改まったときにも次第に大きな声で話をするようになりましたし、顔の様子も円満な感じを受けました。

一か月位たつてからその子は「もう家に帰ろうかな」と言つたので帰ることにした、と母親から報告を受けました。

勿論その他人の中で過したことで全部が全部解決したわけではありません。小学生になってからもいろいろなことがあつたようですが、常にクラスの子どもたちがその子に協力してやっていたということです。

私としてはその子の事以外に予想していなかったほかの子が長いこと静かに目をつむり期待の心をもって協力してくれたことや、できたとき拍手をしたたえてくれたことは忘れることができない経験でしたし、改めて幼児に対する期待は性急にしないで「待つ心」が大切なのだという貴重な体験をしたのです。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)